陰肉奉納祭　後日談

n e l e n e l e

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
陰肉奉納祭　後日談

【Ｎコード】
Ｎ０３８９ＨＸ

【作者名】
ｎｅｌｅｎｅｌｅ

【あらすじ】
【陰肉奉納祭】
それは代表に選ばれた人間の生殖器を神に捧げ、一年の豊作を祈る儀式の事。
男の子なら陰茎を切断、女の子なら大陰唇からクリトリスにかけての外性器を削ぎ落として奉納する事となる。
そんな儀式の代表に選ばれた女の子のお話、後日談になります。

前々作となる前日譚はこちら
ｈｔｔｐｓ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８８９５ｈｐ／

前作となる当日編はこちら
ｈｔｔｐｓ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２５５９ｈｗ／

※この作品はｐｉｘｉｖにも同じものを投稿しています

（前書き）

【陰肉奉納祭】
それは代表に選ばれた人間の生殖器を神に捧げ、一年の豊作を祈る儀式の事。
男の子なら陰茎を切断、女の子なら大陰唇からクリトリスにかけての外性器を削ぎ落として奉納する事となる。

そんな儀式の代表に選ばれた女の子のお話、後日談になります。

前々作となる前日譚はこちら
ｈｔｔｐｓ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８８９５ｈｐ／

前作となる当日編はこちら
ｈｔｔｐｓ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２５５９ｈｗ／

※この作品はｐｉｘｉｖにも同じものを投稿しています

「はぁ～、やっと帰って来れた～」

アタシがカゲニエとして神様におまんこを捧げた陰肉奉納祭の日から今日で一週間。

外性器を丸ごと切り取られた際の傷が治るまで入院していた病院からようやく退院できたアタシは、辿り着いた自宅の玄関で安堵のため息をついた。

（ずっと寝てたせいか歩いただけなのに結構疲れちゃった……それに、おまんこ無いから歩く時の感覚もちょっと変だったんだよね……）

一週間の入院で落ちてしまった体力と歩いている時に感じた股間の違和感を考えながら、帰ってきたらまず最初にやりたかった事のためにアタシは浴室へ直行する。

（おまんこが無いのを直視するのは辛いけど、これから一生付き合っていく身体なんだからちゃんと確認しておかないと……）

やりたかった事とは自分の身体、つまりは股間の状態を確認する事。

入院中はガーゼが貼られていたせいでロクに見る事すらできなかった股間も、家に帰ってきた今ならじっくりと観察できるのだから。

服をすべて脱ぎ終えたアタシは浴室に入り、姿見の前に立って自分の身体、具体的には股間部分を確認する。

アタシの股間からは女の子ならみんな持っているはずの割れ目が完

全に消えていて、割れ目があったはずの部分には両足を閉じて立っている状態でもわかるほどのクレーターが作られていた。

「うっわぁ、結構えぐれてる……そりゃこれだけ凹んでたら歩く時のバランスも変わっちゃうよね……」

想像よりも酷い事になっていた股間を見て、ついそんな独り言を呟いてしまうアタシ。

入院中はなるべく考えないようにしていたおまんこの欠損を目の当たりにしてしまった事で、段々と悲しみや喪失感が湧き上がってきてしまう。

でも、だからといって股間の確認をやめる事もできなくて、アタシは浴室用の椅子に腰掛けて脚を開く。

抜糸が済んで傷も完全に塞がり、ツルンとした皮膚の中に膣と尿道の穴だけが開いているアタシの股間。
丁寧に縫ってもらったお陰か中央部分を縦に走っているはずの縫合痕は殆ど見えず、だけどそれが逆に割れ目の痕跡すらも残らなくなっているように思えて寂しくもなってしまう。

大陰唇も小陰唇もクリトリスも、そして割れ目の中の粘膜さえもが失われた股間は手の平で撫でた時の感覚すら変わり果てていて、おまんことしての柔らかさや溝の感触などは一切感じ取れなかった。
もちろん触られた側である股間からの感覚も今までとは全く違い、性感帯を刺激された時特有のゾクゾクとした性的快感なんて全く感じられない。

（おまんこが無いのってすごい違和感……でもこれからトイレで拭

くときやお風呂で洗うたびに触るんだから早く慣れなきゃ……）

どんなに欠けていようと、どんなに悲しかろうと、どんなに気持ち良くなれなかろうと、これから一生付き合っていく事になるアタシの身体。

アタシは自身の股間をもっとしっかり確かめておくため、一週間前に新しく作られたばかりの膣口めがけて指を伸ばしていく。

クチュリ……

膣口に浅く沈めた指先で感じる温かくて湿った粘膜の感触と、指を挿れられた膣壁から背筋へと走るくすぐったいような気持ち良さ。

指と股間から伝えられる膣についての感覚はおまんこがあった頃と何ら変わらなくて、その事がアタシの心に少しだけ安心感をもたらしてくれた。

（あっ、濡れてきてる……スイッチ入っちゃったかも……）

カゲニエに指名されてから陰肉奉納祭までの間は暇さえあれば思い出作りのためのオナニーをしていたアタシの身体にとって、どうやら一週間の入院と禁欲は欲求不満を貯めるのに十分な長さだったらしい。

いとも容易く火照ってしまった身体の熱に導かれるように、アタシは右手を股間、左手を乳房に当てて本格的なオナニーを始めていった。

おっぱいを揉み、乳首をつまみ、膣に指を出し入れする。

完全にスイッチが入ってしまったアタシの身体はちょっと弄っただけで大量の愛液を分泌するほどに興奮していて、滑りが良くなった

膣はあっさりと中指をズッポリ咥えこんでしまう。

「んぅっ……良かった、ちゃんと気持ち良くなれてる……」

おまんこを失った身体でもちゃんと性的快感を得られている事に安堵しながら夢中になってオナニーを続けるアタシ。
膣の中に埋まっている指をより奥深くまで突き入れるように動かすと、指先がコリコリとした何かに触れた感覚があった。

(これ、アタシの子宮口だ……千春さんの言ってた通り、ホントに指で触れるようになってる……)

カゲニエの先輩である千春さんから教えてもらい、実際に彼女の物を触らせてもらったりもした子宮口という器官。
膣の一番奥にあるためにディルドを使わなきゃ届かなかったそこも、おまんこを削ぎ落とされて膣が短くなった今では簡単に指が届くようになっていた。

実はアタシの子宮口はまだまだ性感帯としての開発が進んでおらず、触った時の気持ち良さでいうとクリトリスには遠く及ばない。
けれども女性の中枢に直結しているその場所を刺激するたび、下腹部の内側にキュンキュンとでも形容できそうな重くて甘い疼きが溜まっていくのがわかるのだった。

クチュクチュと淫らな水音を浴室に響かせながらオナニーを続けているとアタシの身体にさらなる変化が起こる。
下腹部で生まれた熱と疼きが股間に集まり、もう存在しないはずのおまんこがムズムズと刺激を求め出してしまったのだ。

(なんで股間がムズムズするの……？もうおまんこなんて無いのに

……）

アタシの頭の中にだけ存在するクリトリスがぷっくりと勃起して「指で触って欲しい、捏ねてつまんで気持ちよくして欲しい」と主張しだす。
でも、実体が無い幻のクリトリスを触る事なんかできる訳もなくて、アタシはある意味幻肢痛とでも言うような解消できない疼きに苛まれ続けてしまう。

「あぁっ！クリトリスっ……触りたいのに触れないよぉ……！なんでぇ……」

おっぱいから離れ、クリトリスを求めて股間をまさぐり始めるアタシの左手。
だけどかつてはクリトリスが付いていた場所をグリグリと撫で回してみても、突起をつまむかのように親指と人差指を動かしてみても、指は虚しく空振るばかりで期待しているような快感は一切得られない。

（そっか、そうだよね……もうアタシ、絶対にクリトリスじゃ気持ち良くなれない身体になっちゃったんだ……）

触ろうと足掻いてしまった事で改めて実感してしまうクリトリスを喪失したという現実。
これからの一生においてもう二度とクリトリスで感じる事ができないという喪失感や虚無感は、興奮していたはずのアタシの身体を急激に冷ましてしまった。

「うぅ……アタシのクリトリス……ひぐっ……アタシのおまんこ、全部無くなっちゃった……無くなっちゃったよぉ……」

アタシはもうオナニーをする気分なんかじゃなくなってしまい、失われたおまんこを思って浴室内ですすり泣き続けたのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

アタシがカゲニエに選ばれた陰肉奉納祭からそろそろ２年。
おまんこを失ったばかりのアタシは歩く時の違和感やトイレの仕方など色々と戸惑ったりしたけど、今はもう慣れてしまってあまり気にならなくなっていた。
オナニーの時にアタシを悩ませた幻のクリトリスからの疼きだって、子宮口の開発が十分に進んだ今ではすっかり鳴りを潜めてくれている。
おまんこが無いというのはもちろんとても寂しい事だけれども、2年という時間はアタシが自分の身体と折り合いをつけるには十分だったのだ。
そして、この2年間で起こったアタシにとっての大きな出来事がもう一つ。
なんと、彼氏が出来ました。

今日は金曜日。彼氏の家で夕食を楽しんだアタシはソファーに寝転んでダラダラとした時間を過ごしていた。

「そういえばソーくん聞いた？今年のカゲニエになる子が決まったんだって」

「あぁ、もうそんな時期か。今年は沙恵香が先輩として色々教えてあげる番だったか？」

「うん、ちゃんと不安を解消してあげられるように頑張らないとね」

今会話をしている彼こそがアタシの彼氏。アタシより1歳年上のとても素敵な人で、壮吾って名前だからソーくんって呼んでいる。大体2年前に知り合ってから親交を深め続け、紆余曲折の末半年前に晴れてカップルになったのだ。

「沙恵香は今日も泊まっていくんだろ？そろそろ風呂入ってきなよ、もう沸かしといたから」

「ありがとう、じゃあお言葉に甘えさせてもらおうかな」

彼氏の家にお泊りに来てただ寝るだけで済ますほど、アタシもソーくんもウブではない。
この後に待っている大好きな彼とのセックスへ期待感を高めながら、アタシは身体を清めるために浴室へと向かったのだった。

お風呂から上がったアタシはブラとショーツだけを身に着けた下着

姿になり、ソーくんのベッドに座って彼が来るのを待つ。
「おまたせ、身体冷えたりしてないか？」
しばらくするとパンツ一丁のソーくんが現れて、気遣いの言葉をかけながらアタシのすぐ隣に座ってくれる。
ムキムキとまではいかなくてもしっかりと引き締まった彼の裸体はいつ見ても魅力的で、我慢ができなくなったアタシはすかさずその腕に抱きついてしまった。
「ううん、大丈夫。早速だけど……シよ？」
「はは、相変わらず沙恵香は積極的だな。まぁそれも好きな所なんだけど……んむっ！？」
口と口でのキスがアタシたちの始まりの合図。
ソーくんの言葉を遮るかのようにアタシから口付けを敢行し、貪るように彼の唇を堪能していく。
「んちゅ……んっ、んっ………ぷはぁっ！」
「はぁっ……はぁっ……………沙恵香、上脱がすよ」
アタシのブラジャーを脱がしておっぱいを露出させ、そのままその膨らみを優しく揉んでいくソーくん。
強すぎず弱すぎずの絶妙な力加減でおっぱいを刺激される身体的な快感と、大好きな恋人がアタシを愛してくれているという精神的な満足感に、アタシの身体もどんどん興奮していくのが自分でもわか

った。

「んっ……いいよ、ソーくん……今度は下をお願い……」

おっぱいを揉んでいるソーくんの手を取って、ショーツの中へと導いていくアタシ。

そこにおまんこが存在しない事をわかっている彼はアタシの股間のつるりとした感触に戸惑ったりせず、迷うことなく膣内に指を挿入してくれる。

さっきまでのキスとおっぱいへの愛撫で十分に濡れていたアタシの膣は容易くその指を受け入れ、もっともっとと快楽をねだるようにギュウギュウと締め付けてしまう。

女の物とは違う太くてゴツゴツした男の指での愛撫に喘ぎ悶えるアタシを楽しそうに見つめながら、ソーくんはアタシの腕の手を取って彼自身の股間へと引き寄せていった。

「なぁ沙恵香、俺の方も触って欲しいな」

そんな要求に応えるようにアタシはソーくんのパンツの中へと手を侵入させて、今度はこっちの番だとばかりに彼の玉袋を優しく撫でていく。

男の人に取って最大の弱点であるタマタマも、優しく触ればちゃんと気持ち良くなってもらえる事は今までの経験で分かっている。決して痛みを与えることなく、だけど快楽は感じられるような絶妙な力加減でアタシはソーくんのタマタマを転がしてあげるのだった。

ところで、アタシがおちんちんではなくいきなりタマタマの方を愛撫したのにはちゃんとした理由がある。
そう、実は彼にはおちんちんが付いていないのだ。

ソーくんはアタシより1年先輩のカゲニエ。彼のおちんちんはアタシのおまんこと同じく、陰肉奉納祭で神様に捧げられて灰になってしまった。

更に、男性のカゲニエはおちんちんを体内に埋まった部分まで全部切除されるだけでなく、座っておしっこが出せるように尿道を玉袋の裏へ移設する処置を受ける。
つまりソーくんのおちんちんが付いていたはずの部分は切り株や尿道さえも無く、ただ滑らかな皮膚で塞がれているだけの状態になってしまっていた。

おちんちんを失ったソーくんの身体にある性感帯は、乳首、玉袋、尿道、会陰、そして何よりもアナルと前立腺。
アナルと前立腺はこの後のお楽しみにするためにあえて一切触らず、アタシは玉袋や尿道、会陰をまさぐって彼の事を気持ち良くしていく。

ビクビクと身体を震わせて快感に身を委ねているソーくんの尿道から、少しではあるがヌルヌルとした我慢汁が分泌される。

「あのね、ソーくん……そろそろ……」

「あぁ、そうだな……」

愛撫によって股間が濡れ始めている事をお互いの指先で感じ、十分

に興奮が高まったと判断したアタシたちは次の段階へ進む。
ショーツを脱ぎ捨ててベッドへと寝転んだアタシの上に、同じくパンツを脱いだ彼が覆いかぶさってくる。
何度も見ているとはいえ、おちんちんが無い股間というのはやっぱり違和感がすごい。
完全に何も付いて無くてのっぺりとしているのならまだしも、タマタマだけがブラブラと揺れているのもよりおちんちんの喪失を強調しているようだった。
まぁ、アタシの股間だって割れ目が無くて膣と尿道の穴だけが開いたクレーター状態なのだから、あんまり人のことは言えないんだけど。

「沙恵香、愛してるよ……」

「うん……アタシも愛してるよ、ソーくん……んちゅ……」

ストレートな愛の言葉と共にアタシの事を抱きしめてくれたソーくんに、こちらもしっかりと愛の言葉を返す。
上からのしかかられるように抱きしめられるのはちょっとだけ重くて苦しくもあるけれど、その分全身で彼のぬくもりと愛情を感じられて幸せな気持ちになれる。
貪るような深い口付けを交わしながらお互いを強く抱きしめ、密着した胸の間で乳首同士をクニクニと擦り合わせていく。
生殖器という人体最大の性感帯を失ってしまっているアタシたちにとっては、乳首からの快感だってとても大切な物だった。

そうやってしばらく抱き合ったあと、アタシたちはお互いの股間と股間をくっつけるかのように腰を動かし始める。
グリグリと股間を押し付け合いながら「まるで貝の無い貝合せみたいだよね」なんて下らない事を考えていると、ソーくんの腰の動きがカクカクと前後するような物に変わっていた。

アタシもソーくんも性器を失ってから結構な時間が経っているから、実は日常生活の中で喪失感を感じて辛くなってしまう事は殆どない。
だけどこうやってセックスをしている瞬間だけは、いくら股間を押し付けあったり腰を前後したりしても挿入どころかまともな性感を得られない事が悲しくなってしまうのだ。

特に、膣が残っているお陰で挿入される事自体は可能なアタシと違って、おちんちんを挿入できなくなってしまったソーくんの悲しみはかなり大きいらしい。
アタシには元から付いていない物なのもあっておちんちんを失うのがどれほど辛い事かはあまり想像できないけれど、付き合って最初にしたセックスの時に彼が泣き出してしまった事は今でも鮮明に覚えている。

それでもアタシたちは、おちんちんやおまんこの無い身体でも形だけは男と女としてのちゃんとしたセックスをしたくて、喪失感や悲しみを抑え込んで腰を振り続けるのだった。

「ソーくん、今日はね……向かい合ったまま指でシたいな……」
ある種の儀式的な行為が終われば、後はひたすら気持ち良くなるための時間がやって来る。

この時のやり方はペニスバンドを使ったりシックスナインで責め合ったりと色々なパターンがあるけれど、今日のアタシはソーくんの顔を見ながらセックスをしたい気分だった。

上下に重なった体勢から９０度横に転がり、横向きの体勢で向かい合うように寝転ぶアタシたち。

まずは膣やアナルに挿入する指を濡らすため、お互いに相手の右手を引き寄せて人差し指と中指を丹念に舐めしゃぶっていく。

レロ……チュプ……ジュプッ……

この愛しい人の指がこれからアタシを気持ち良くしてくれると思うと、自然と熱が入ってエッチな舐め方になってしまう。
それに、ソーくんの方も同じようにエッチな気持ちになっているのが彼の口の動きや表情からひしひしと伝わってくる。

舐めあげて、吸い付いて、舌を絡めてと色々なやり方で指に唾液をまぶし終え、ついにお互いの性感帯へと両手を伸ばしていくアタシたち。

「くぅっ……ふっ……はぁっ……」

「んぅ……うぅんっ……あぁっ……」

お互いに左手で相手のタマタマやおっぱいを揉み、右手の指でアナルや膣を責めていくと、アタシたちの口からは抑えきれない喘ぎ声が溢れ出す。

お尻の奥まで挿入した指で前立腺をコリコリと刺激してあげる度に、身体をビクッとさせて気持ち良さそうなうめき声を上げるソーくんがとても愛おしい。
膣奥にある子宮口が彼の指でグリグリ押されると、子宮から全身へと重くて甘い快感が広がって頭までピンク色に蕩けてしまう。
もっとソーくんの事を気持ち良くしてあげようとアナルに挿れた指をお腹側に向けて曲げれば、彼も真似するようにアタシの膣内で指を曲げる。
ソーくんが指を抜き差しして膣壁全体に快楽を送り込んでくれば、アタシだって負けじと彼のアナルに挿れた指をピストンさせる。
曲げたり、抜き差ししたり、ひねったり、二本の指をバラバラに動かしたりと激しく動き続けるアタシたちの指。
いつしか穴の中を責めるお互いの指の動きは完全にシンクロした状態になっていて、アタシはまるで指を通じて膣とお尻の穴でセックスしているような感覚に陥ってしまった。
「ねぇソーくん……んんっ……タマタマせり上がってきたよ。そろそろ射精……あぁんっ……しちゃいそう？」
「沙恵香こそ……ぐっ……ナカすっごい締まってるぞ。もうイッちゃうんじゃ……くぁっ……ないか？」
「うん。だから……一緒にイこ？」
「ああ！一緒に……！」
ガチガチに勃起したりビクビク震えたりするおちんちんなんか無くても、タマタマの動きで彼の絶頂が近いことがわかる。

アタシの膣もソーくんの指をギュウギュウと締め付けながら、もうすぐ訪れる絶頂を今か今かと待ち望んでいる。

そして、ラストスパートとばかりに指を更に激しく動かしたアタシたちの元に、ついにその時が訪れた。

「あぁ……出るっ！沙恵香……沙恵香っ……うっ！！！」

「来てっ！ソーくん……好き！愛してるっ！……あっあっ……あぁぁぁん！！！」

愛しい人の名前を叫びながら、ほぼ同時に絶頂へと至ったアタシとソーくん。

玉袋の裏にある尿道からドロっと溢れてきた彼の精液を左手で受け止めながら、アタシの方も荒い呼吸を繰り返して絶頂の余韻にひたる。

呼吸を整えている最中にふと自分の左手を見てみると、その手は予想通り大量の白濁液でドロドロにコーティングされていた。

（すごい量、それにすごく熱い……これが子宮まで届くと赤ちゃんできるんだよね……）

今はまだ早いとは思うけれど、いつかの未来には起こりそうな展開を妄想してしまうアタシ。
もし彼におちんちんが付いていたのなら、この熱を直接お腹の奥に注がれて孕まされたのかな……なんて事もつい想像してしまうのだった。

ちゅっ……ぺろっ……はむっ……

「ソーくんの精液……じゅるっ……苦くて不味いはずなのになんでか美味しく感じる……」

激しい絶頂から少し時間が立って呼吸も落ち着いたあと、アタシはお掃除フェラならぬお掃除タマ舐めでソーくんにご奉仕をしてあげていた。

愛しい人から出た物だからか精液を舐める事や飲み込む事に一切の嫌悪感などは起きなくて、それどころかシーツに吸われるのが勿体ないとすら思いながらアタシは玉袋から尿道、会陰にかけて付着した白濁液をペロペロと舐め取って嚥下していく。

片方のタマを袋ごと口の中に含んでコロコロと転がしてみたり、逆に袋だけに優しく食らいついてグニャグニャした分厚い皮の感触を堪能してみたり、おちんちんが付いていたはずの場所を舌でグリグリしてみたりと時折遊ぶような動きを交えながらも、アタシはしっかりと彼の股間を舌で綺麗に掃除してあげる。

ちらっと上目遣いでソーくんの顔を確認してみると、彼はとても気持ち良さそうな顔をしてアタシからのご奉仕を享受しているようだった。

「沙恵香のタマ舐め、めっちゃ上手くてエロい……チンコあったら絶対勃起してたわ」

「そう？それならおちんちんもっと気持ち良くしてあげるね」

「あっ……手コキも上手い……もっとシコシコして………」

セックスの最中でさえなければおちんちんが無い事に対してこの程度の冗談は普通に言い合える。

おちんちんが付いていない股間のすぐ近くで手コキのジェスチャーをしてあげると、彼の方もそれに乗っかって楽しそうな反応を返してくれるのだ。

「じゃあソーくん、これはどう？　こっちは？　おちんちん気持ち良くなれてる？」

「あぁ……全部最高に気持ち良いよ……」

調子に乗ってエア亀頭責めやエアフェラなどで幻のおちんちんへとイタズラを仕掛けていくアタシと、それに律儀に応えてくれるソーくん。

アタシたちの幸せな夜は、こんな感じでイチャイチャしながら更けていくのだった。